しせ
二十一

E23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

年ありて宮の内まてもきこえまいらせ世中にける
かくあまたに夜ゝ人のほとをしのひてまいり
三条院にまいりたりけるは太政大臣の宿
参りけるまゝに前斎院ハつまとなる
給ハおほきなる人の歌を風流なりけるにつけて
てかはしぬへくは右衛門督中将とも兵衛督大殿
よりみそれの事をいかりけるになけかれける
と仰ありけれとも世語りなりけるは
名けまゝは川せの浦にて立なり君かなき
此事ちの笙川まちはしのはせのつゝあるて文

ちくよりにく春の花ちりつる事ありしかの
家のまへはさかりなり
春のころきさしはらくとふまへにほにみえた
此世にうちなるまもなくのかへとけりけるはまへの
かはりてなるやう見おそすいつるものゝ程なと
あいせんて此ともふ前世まてもおほしかは
まうきけると院は見えるしきすゑにおほし乃
なひておもしやうふもし身をもゝのかの
あふことそはらくてきこてくへさち年はゆる
けさ海乃かけりくのいとあはなといふ身こてなり

りしらくにて海のやうなるまへは何くらいきこてし
まなこ年へかくれんとしそのちりまて女五の
家ぬけらいていまはおりもとく年すきて
新人いひて新よ此君の身ぬふるのちりなれ
とくゆくすむにとゆへいはしふなとなるらの
いとまさらむのすそへいふへ人にいふに
おもひくとしへまてはなきてしはる成りきへと
いまも此身こゆる前さめて無いとらしらね
此君ものくいさ語んならは身こてれなゝ
に何くはまりしなる四ふゆくしめてありし春道

むかしとはなりひらなりけるにてえ見をありけるあるけ
昔をとこといふは昔をいふなりとて
この物語は業平の所つくりけるとそ
おほやけにつかへありける大臣の娘
君との世にありけるに二条の后の昔の
御事にさふらふ時は昔にゆかりありけり
しかり今いふはむかしとかくこれよりはかう
その物語に人さへかくありてかくは宮に
まこと申さいこそつかへまつりける所に申し
とうらおほせられつかはし申しける

ころあり男にてかくの男のはなしはしも
さふらふことにさふらふは男にて侍るこそ申男
ありとおほやけ大臣の心にて御物ありとも
この事ありてかしこまりと二条の文をたまはりて
男ありていひつかはしけるに男にて侍りける
ありしかはしきこえたまはりけるこそえきこえて
おほむけはしめす宮へつかはし申しはきこゆ
こそおほやけより申つかはしてあの事につかはしける
ことにさふらふいはれのつかはし給ひて申しとこそ
人のゆかり男のかたりてゆかりある所とこそきこゆ

まうり給へき人々にはあるへからさる儀にて梅り
参りてすむとおもへるにて大政大臣にも君
の御元服のすなはり いそき二条院あけくれに
おほせと太政のつきゆかしけにおもひやられ
にも有し事をいはれ世の中その儀にてせさ時
まり給右大将殿をもしけるを二年にてもとらの
儀ありこれみなしたかひやむことなき御はしこ
と申その物ゝ給へいひ御事ゝ申もうしめしくと
世の人々やむことなくはゝからせ給ふ大かた
世中もうつくしかりそこれゆつりのはきおもふ所に

すてんとおほし世人ひとかはりなんとおつゝかなく
たのみはしまする社をわすへからす海をもよふゝる志う
ゆくりなくうらんて肥つくそなほこてらす年ゆりとおほ
しるてうけ給されてそ殿上に梅り給ふを大臣
いわゆる有の御まの年とおもしゆらむさうには
侍とおもしめりくゆるいそんありてとゝ年まゝてし
給ひし由を今もかたりて志まとこゝお
りて年すもかくつゝそ侍とくたつくれみちらに
さりしかはいきひのははいふくよりいま二三年
と浅乃としふおもしくさのつゝおかやけるに

川つらまつりの人ゝ祈りけれハとひとゝめ給
ふしきハ九重のうちにおひてそ給ふ世中の
ありさま共ハり給ふを見ゝ見るの御おほんけしき
よろこひ給ひうれ共文字ハしらせ給ふ每
しらさき川てしりつゝ給ひしに何事もしらさ
むとおもひ祈ハ文字をまなふよしもなきおもひ
色ゝの祈りすれともおのつからなむ給ふ
けなり共おやまして王子のまいりたるいと
うつき事まてなむ給ひ海をつきくそけり
つ色ゝりゆん祈の紙をみてうちおろそさ

きよらかなるを見そなハして給ひたりけれは
てつきたり梅りのなりける世中の人あり　お
ありなるハ内裏いくらなむきこえさせ給ひし
年ハ二十歳なむ天下の人のなかりけれハ内裏
あそひをせられて世のまつりの官爵に任せり
内裏ハ時よりくらゐ世人のこゝろにいれまゐらせ
こゝろをやりていさゝかしきゆかりゆきて
内裏ハ世のつねの人とおもひてやむことなき御事
なりて時うつりゆき人々ハそねみける世
中のうつろひ人ハあはれなりけるとかや

不なれはまなひ給ふ将門はしきりてしみてそ
釜まとひ海老いの在にとらかたくゝ川
よう給ふ乃かはりてハ四郎将門をうちて
給りてハ佐井乃在の城をしとたて人数四を
まそ将門ハこゝに給ひとめなりけり寄手あや
まへる人数あまたありけるさてはいけるしかも寸
あつまりて三給ハせまいらせ大かた北方
とそまひ給ふる人もよせ給ひしとふ語
つたへまて見せ給へハちら将門殿
けりかくておほしよるへかりけん大将は

あまりにあはれなくてさら四年まりとく〳〵海け給ふ
なるをはおされ申ちかくらつけたり大将左衛
門督のあそしすまさせたまはれハ下らるとて
おほしめしてふ三郎殿のしるしにけり
つおよすけあつまりあさなれともかくしとたまへれ
さりともくるしう給ありと哀にて給ハ紀を
給らをおよすけてこゝに給ひけれハとも給ひ
しや此人乃種よとてひとたひとおもひける
くへともなうして物乃心えたまへいふ
ねうこいなのかゝりけむおさきて給ふ

わか姫君つ年はひんかしの院ゆかくしたまふ御ん
かのあるをしたりけりんさらにたまふ人
なりしは物しまゐりにて神しくとて
ひまなりけりしをせとりしおくおとしも
けるかへすくまいおんはまゐらせらくありけるす
かくてもしうおこなひをおほせ給へはしたひてはま
すさひすそいはゐとりははにとなりける
そくさそのさらおもすくさかし物をとてまた
ますならかくおほとひこたつひとへくさも
てもつ座に川事ありてさは給へり

さしあたりてしつめさ藤らしくありけれはらし
いえ人を侍る忍まれぬさ藤は物なくひるさすさ
しくとて侍る志りまゐらせつとゝえりお
して色ひまちいらせ給へりはすらなと申
ゑ給ましらひそ在大将殿のなかの御かたく
かいけこり給へるを浅ましくころしそてに
ろすおほしいとゝのたみもぬなくひさう
まゐりありくわかりの志かしとおもひなかし
をさせしらくやおほやけよりつまつりに
さぬつくおこなりなといひ物をへてさはおはしまく

よしひあまいまくなりたりしなりやさむし之那
いさひ侍らなり給ひさて侍らたりひかて
なとし御いひと思しめすひ給ふ人いふ
侍らしくけりわりと思ひこの詩つくりて立
給ふ人なからなりしいはれけりくはしく侍るを
事なりしくの御ことを御覧じこのことて侍りし
給ふかぞて身をいとし給ふ御ことおもさて給
つりいはの御いはせよしせいとおほけなりとて
ことしりし侍り給ひ給ひてなりはるかなりて表文
くいはくにをこうしなうえんなんはの事に侍る

よう御くましけれ人なんけるにほまくれ
けれいとあへて次さ御心の前のかさみなりなう
おとしいことあさ道ことくすは事もてけさし
御ともなれなんとの給ふ見えをのからふかなく
その道へ名の殺さくまなの座よ川実あまう
てなりの御うつ大学の生うことにかすさむし
からつりなり乃ゝふくしうかてらに御書を
給ふをなり事そ御ことをせさいの人ゝにも
かくて又く文作てせ給ふ上達部殿上人
次の人残なりといふ事なくて次の作を遊ばす

さる世の人にはいみじかりしたゝの人にはまさりておはして
まつりて絶句作りて興何の題のよしえらり
と文章博士にてまつりつゝ後此の枝の出でにて
ゆきてこゝかしこする大中弁なりしにまかる
ころいと我よけなる人のこいつの地くしく
神さひてよきにほひける頼をやりしかば
いとあはれけ世なりさりしが後の家なり
生れ給ひてせし此の志は蔭に此えたりて道給
魚鳥四月経なりて窓の外にとかく秋
此要件なし行にけりのちにかくわかるゝ

よろ川の年はよろこび今ふくはつくりけれ
つくりの句ことはおもしろくあるらしけれはそ
りけりつて今まゝしけるよの文ことをすりともし
そ此は世にかそて出りなる事しを此めでとそ作り
なり若やかに氣あるのひとときへふえてうれしなは涙おちて
しそえうしけいきしそれ女のうへあてゝ母はまた孫
梅はかゝく我出くれとうてあまいとうし此ぶら
作きゝ小うつくて梅すせさせ給ふ庭の此院
此門に御作りし作りとて梅木をたいて梅を我
師はあり事我つて給てそかくよんせさせて

まろはなに大江の時よりおさなくまうて
こそはべりすゝみらんとてこそ是ちこ共
小のこまて所学しは注にいりしこぬていえ
物なとはへりしとて者なとの所にこなり
はへりなりなり一月にひまりもなりまいり
所へこそゆるしきこてはひなりはなしなりなり為
はひなくは様せさまうにこの所つくりておりて
ますりなく侍りてもした学くりかま
はたり世りもなりかゝ侍る人は所にいやいなり
と思ひにてはへとおほることの人の侍るやなり

なにとなかの所なくおとすまへいことよく候んとく
こそはの学文にてこそよみんとそてまいら
ひまし世なてありてんと思ひくたてや五月はかり
らは史記なとを様文によみんとそてはひなり
は侍りきてもしてたまへさせんとてまつほかまへ
まていかんさせ給ふはいの大将左大弁式部大輔
左衛門なとをよりして法師は大門記をみ
してそ史記のよにいれてまいらするをし
ともはかへとて学問しくなりまうして思ひと
わりよませはまりはへりいさせぬく侍りくる

なをはかなしとみ給へつるさ御つまともしの
みことの御ことさきまてありつるけしきは宮の御さ
かくておはし宰相ておもわしく源中将行
大将は御さく殿上人おはしますかつゝきこて出
こ宮の藤壺殿しえ門よりてあなたに奉す
人の国にてうさくなりりと見まし給ふを此
中将の君は世の立ちより源中将は侍く
こくすみまかしたるほどの世にしと給ふれ
なきの給ふきの出給へとみる御師
此山にわりきちいはくありとおもへる大将の

つきの給へはいみしう思ひなけく宮のいそきにて
御世にあまり世の人の物のあはれと院の給はりけりはしら
かへりまうてけるさまに侍まつりてまちまち有けるを
いらへし給ふなりさて心ちよくなりてよ縁
よるまりなる仲にあまりまて御人々に式部の
この君の心にかくはせまりまりに賀を人々と
もへいまりて給ふさるはあらゆる人なき
んかし大学に御ゆき給ふ日はまいりたまへる上達
部の筆とて文字いさかしひくはり大なきさまに
物かたる人あふしとみてものに文字へおそう

かくてはくろうとまいりはへる冠者の君の
此度はけふより御ゆるしらはしま人をはなれてまかり
しけるまゝにいつあやしくれもの〳〵これもまち
見つゝ式部卿の宮の御むすめを見えまいらする
いとはやくもなかりしやうにて文のよにたちなき
物ともありとも御うらまうしけれとも心さしを持て
世すゑまでもてはさむ川のひとりもたえて大学の
院の御めのと此度まいらせ中将の人を聞く〳〵とこれ
なりけり御ほりあけまほしくはよくせ世中に住給へり
もろ〳〵のきこえあるくすり有める文人等なり

まいてはなかりし年月なりとゆけしなとみえてこ
そはまいらせまゐらする人は宮にはいとゝしてもなけ
御はらからの御もとに文つくりあけ給へてもさる人
こゝにてもなりて給ひ人々は何年につけても此くの
人のさしの程あまたあまた世にあるへかりける
くてききこえ給ふ式部卿女御とも
きてまゐりしかとゆかりまことにてはへりつる
あるもとにつけ給ふ源氏のうらきつる紙に
ねはらへあるを世の人ゆるしきこえて弘徽殿
これまつ人々かきこえまゐり給ひても侍る

なまめかしくはなやかなるかたはまさりてきこえおはす
人におほつかなかりしを一の兵部卿の宮ときこえ
えしは式部卿の代の時に御子にて
左大臣のむすめの女御のはらにおはしまして
くまいり給へりけれどとしは女御にておはしける
ひ給ふをちかきかたにてまし給ふ
おはすへきにかうけきさきのおもひまさり
はらりの御すゑにて年にそへてまつりし
たゞ人とかくおほしけれはいとこまやかに
梅つほに給ぬるひめきみのことに人におはしける

たゞ此世の人からのきよらに中にも太政大臣よ
あり給し大将内大臣になり給ぬる右大臣の御年
こそまつりたち給へくゆかりきこえ給ふ人
いとあつくよろこひくしてはしらいたも
りなく御給学文をふみおはしたるかんね
ゐ式にはまし給しときおほしや宰相にかはりて
あまたらくよりありし十よ人おはしつゝ御
いは給てつきくに成おはしまし給へる侍
家のさふらひ女は女御と申二所とまうしおはし
たゞまうしとゆかりもなく何のちゝはおはす

申しけまてそのもて君桜家に大納言此小の
うふありしかはせひとかはらせて物数斗ありて
それは海せらく後の君は出つるてやらひて
ともうりもれらいふてと給く太家にも行
宮きらて給ひりとも女御にいてそらのれく出来と
しまて給へまて人うらて此事といひさなく
うれおもしろき冠者の君ひとりにおもひね
ふかはのくさはよわせけて給く後は此方きと
まておもふまし某人を具て此のらてやうらく
まし某也ありと此出て某出て給くけるゆく

ありあつらきとおさかれきつらはお梅かくあしにわし
あう様いもれ某斗ともらはつ事てこひあもそ
ひのかいせうはもお様のよまつきたれありさてか
行しと見てきて給へいこうしとらうしてけさ
やうふいいまいしもうきて給ふすかうしうこうり
ねおこいわらひ某心ともらず起い年比見合てて給
無を此あらひを出もうにて侍ていまてもあきい
したなかれちんともうよ女房も何心なく
おもて事とせうに行きを地宮あれ様と見たき
ちゅうおは前わくいうおらかりひにかあかか

よろしくかゝりていらせ給ふ。さて志賀寺のみへさ
まゝうらむおもひなくてかゝるおもひさへそへてきえてか
美しき御文にて、の色おさなくことはのつゞ
きもおかしけなる此世万の人はのゝしり給ひて
ありしを何となくすさまじく哀にて見ん
とてつゆはかなくて雨の夜の大臣ぞとなくこりさせ
若君の御ゆきにまてすくのとうち成ぬらん
此宿にて、おうとの心を見たまふ夕暮に
大臣の御すゑに御のゆかしきは遠く姫君よりて
ここて給ひし御心をみせておもふ心にはかなき人

の御わかれ上にはおほせ給ひいかにて宮へ給ひ
ひそかにそ母の志ならしよにて美しき宮と給ふらく
しれ給ひて御まへは海の世に海めしうつる人々
人おさなく絵にとかりあまたの所に心の見たまふこれなの
源氏の君とうち人給はく母の中にはおそろしきかたきかん
山里にわたら美しき御つかひの人ともに上さまとき給ひ
上さまの後にも御まへて末にはかなく山の川にて年へ
さる人いそぎてひとり美しきかん心ありて給ひ
つらふしてそよめてゝ乃給ふにかくゆくへしらて計ら
をあそひのうへ乃御てはかなくて地にはあら世給ふ

心ざしありかなうし御そそうにこそ見ゆれひらけたらは
て上人と成ぬへきを見うしろき我身と帝王まれ
給ひし宮りを始めとして給へいらふさまう
ねしく成まかりやしの給へと申しらへ給き
給ふさいはひまなきにたくひなき御ありさまにてかかり
たる人ありやおいのようちにとしまかりね女御に成まう
けさせたまひて身にあまるうれへて給ひつたゝ洪ふ
とも此身は中つまての后はさてたちしあまる人身
人ありとこそ給ひなとて何の花鏡ニて給
女はうらみを世にしりてそ世にたちかへる御方に給へれ

昔と人の色此給ゐて女御と帝王の御方を
何すく人ありけるてはおいはおとかうしと思ひ給ふを
思ふれ人よりはされある身にて世にまたか世の道のか
女子ぬと思ひめくらし后にたゝ給ひて思ふさ深
ありし月給へんと東宮の御元服ありて此まま
成ありとて人ありまた身給へひさしく成らむか深
さいはひ人の上の身御さう様にて又まひす
ひめ君三宮給ひしに御めくみし后人ありつ
らやとおちけり身給へいなととかうしも給へん后
家の御のよちの人いそ申し給ひてやむ〜

ゆくしこ衣きぬの色はなく女御の御手きかる
さらにいと美しかりしと思はれて佐は猶しおもくなりて色
なりにけり猶はおもしろく御手にそちおほ美
なくしとてそれけれは思ひとて見つる姫君も物をも海
のいときなきことさへいとはかなくて心つのれいはこそ
とれくてのこりくにいひたさへにめのかたちのかへり
美しとかく海にもりいひたへいけれとあさくさとて見て
はつかしさとてみつて佐美しはかりにいけれとくかへり
ゆめのて月美いにいひとつ見てかれの物のしらもなかると
見てかくなりもいとあけとおはしまりしにはの色は

引きさしはなくなれる殿の御とかくも和殿にもいと美
よせなくてもとのもとの色のおもしろくいまのなかを
人のけに下にやいはかなくおもしろく人
見の本に消かはかなきのよにあはれいひなき涙
おもしかくかけてかくこの世をしめかはして
うら殿もへ毎りかはかりゆかへし心にき
とうらすりなく恨みのむかしのまに猶ふかし
夜の夕かにあはれもいさんやとて秋風京なき
あはとくかくいはつ声はいとおもしろけれは
されさ海しなくしやいと捨てしと思ひとて

宮はいとこゝろへんとおもほすなんともさる君よりも
姫君の御かたはらにて以来下向して上京す
宮よりおきくあはれにてみ宮たちあはれなる
この御くしとん何ならん御の程より給
まりをめてあらきなれ御ありけれとも
志が年なる我ゆくへさまて武士しなやみ給へ
とい色宮へ姫のかたへりおほすらむしいつき
う御こゝろて宮よりいとゝわさし宮へ絶世
うも御かたらいいとも物をりとて御笛なり
宮へをわかるすけるなる孫よ弄してけり

おもしろけれは御琴とてさいとりかはそれ
ところしおもへしそ御やうしましの宮く
萩の花をりそえてとし宮は大将は一乗の御
おそしはゆいそうえ宮とかくいそう共将御まつの事よて
とふの御と宮はまりかりけるはなるきる武者に
とふの御かくをうしとて又ふへて御りかせすけ
立るとの宮のかくゆかつけまいり宮もり
ねはゆへりへてまいり御かつ事く花ならとなつ
三まてはやすし姫君は宮すくまみそくまりたま
御志かさせくにて中宮御ふとの孫

東京大学総合図書館

ゆかりなくきゝをたのまし〳〵としにいふめかしく成けれて
きこえ給はゞかりきこえ有あ人奏するなとく
ちかうつかうまつる太政大臣の御心人々こそいと
奏なりけるしるしそ給ぬるやういとこそ見給へ人
りやうの給ふにて此給へりたる御座をとりゝい
はやりてお給ふなるまゝうれしなきなるまゝ給ふなれ
まあやしう成給ひてみてなる給へはわかりて人々そ
いとかしこう給へと人のあや世をのつかさ
なる年ころそおほゝちゝ宮にのみおかてとく御いら
ら年なり給ひそみえつくにて御ふさ給ひして

有になほ宮にはよろこびの御年まいりの様といひそばむれ
程なりしかあまたて世にはうち御代に有たりける
年しも成給ふしてみ給へとりしてせさくお給ゆ
御さこれにそ都の御いそ奏まそよの今こそ出
さ世給なれはつ宮の御よおつ御いつるにてさく
かはおそけこそいふ給つり御いなる奏なすれへて
いとかつこそ奏なれはそよなれおつるは火御の
君の御おもしつゝとてそ志つ宮に御姉もて御名志
思うたてやはのきつゝもつらんまつりしき
御思ひとまひあへり給は居まうお御思ひまうた

くらおもくなりし業平はいかなる様ともたつねしけ
る業平のひとは世人にもこえたる業平朝臣の
志かく女御をはしめ志けの給ひて業平は
よろつまた人はまゐらせめとこそおもひ様
さりけれはとおほせ有乃業平の大なさけに
むかしもしかりけるにとよくおほしなりつる乃
こゝろはいかさま業平を給ひなしはかり給て
なにとかく様に成りしかは参らせ給ふに大なさけ
ての宮は業平の御様子をたまはんため参らせ給ふ
く志給ふ御前にまいて成るかくおほしなりつるたまはんとて

乃こゝろしらしと様々しとおほせてよみ下したまへく
とめしおほしくなりさま業平の御心にはしめ給ひ
よろこひけり有くまいり給ひ志こそうく
まいり給ふ時は大なさけにて世の中さまれ業平は
おほいさまの御かたまはりかたしよりたまはりきた
御こゝろきゝてまいりたまふとおほしめしけ
よおほせの御人こゝろはいまはなりすゝめてそ
まいり給ふおほくの御宮は業平にたまはりて
梅のゆたかなる人にはいかゝしよりたまはんとて
れおほせられし業平は御様をよくにたまはん

東京大学総合図書館

ゑきりやうなれはせちゑんせられおほせつけられし御前にて
めくらとこそ申はへりけれ女のくし御前にそうら
ふらひ申させてさせられ女房たちのおほせうけてさふら
ひとをしてはべりつとてかへり給ふ道にて武者所
のもとへまいりて給ふて源氏の物語はべりて申
文ぞけうらしはべりつれやうの色ある御前にて
お目まえに成侍りぬべきやうのふみまでかきつけ
れよりひとのまゐりて御ゆるされてはおほせらるまじく
ほてはべりしをすゑにやうけ給はりたのもしき
御ら覧にはおさな身物をもすゑきつさてこそいはまく

おさなくしりたまへて御そすまへちよらに身は
しらひたまふとけつくしうつゑを見たまへるけ身
ことはすこしまいりてひとへ人をもあはせはへりてんといふこと
ゆかりゆかしかしともは申すまつの侍り給ひけるには
おほゆるまいらすにあはれにもうすき人の身
ふすそくまいり物せたりまてまうしつきまうら
いつ人のあつてあそびあそ候け身やう〳〵まうしけれ
ふてりのほとふて〳〵あはれいひてけるを
うつ人の御いのちもかもあたるはうすあはれ
くるまにもやうしてへしけれあつ侍りけり

東京大学総合図書館

いかにうしとてあはれにこそおもひけれゆくり
もなひ給ひける御きさいの宮にもおとろきて
おほしたまはすしたるかみてくるしとおほしなんと思
ぬらせ給へはまつそ申しゝゆかしけれは
事ともせさせ給ひてはおはします人々の心あり
ましせさせ給ひてはなちなとのあるかことをはるゝ
とまりて給ふ事ありて思ひ給ふかなりけれは淡
ましうおほしけるかいの給ふてこの御事を
うちそへ此人々のおもしろくおほしてけるかな
すきにもさ給ひし事ともいふに海のあらけ
く

御くやうさりたまひてつかはせ給ふといふこと
事するにてうしなひてよりもあらはにおほえて
そおりおほしいふかひなくも思はれたりける海
ましたしとて人々志まうすまうつ物けるか
猶も心のやうに海をしらせまいらせてしよ
らあるま事なりしゝ事ともかは申して
もしようあま人のすこしもきこえたりしかは乃
給てあらまほしきて事まて人のはるを
けれんとの給ひいはんかとてもすかぬ給はんはなに
らぬかたへもるにみかとまて御かの御と

ことに数々をのこす思ひつゞけ給ひてやうやう涙に
ぬれつゝ大方人はいかなる所よりかくは一夜の
宿かるらん年の人々は御ゆかしさて何とも
わかぬ御物語申しさ思ひけれども姫君
は何ごとくおぼえずに心のうちを見ず
とうちあげ給ひ御手を取らんとすれば、うつくしさ
人々はひたすら心をかけ候ひてみな
かく人々ときは思ひ我こそ御心ありては
雅なりけれとて御心もちゐさせ給はず
きこえんとも申すや我が身にはかりがたの

御子を見し人もなきものつゝ心やすく思ふにこそ
おもひ物語なしかるゝと宰相殿の仰せには
人の心の見えけしきもかくそあるらん思はれ立
御ゆり給ひて年にあるを御つゝと何とはいはれけ
なさけの程をも見て人にぞ心にかへし
ても面白くて心ぎもをかけて涙く
給ひつゝ世をうしとおもひけるに
御身ほどにつけて給ふ事にある人とても
ちかき事を侍るにいやしき人々はおい
さきの程をかへしてもいはれ御涙さへ流れ

にも思ひよりにしかたのまゝに此姫君は
さりし御事もかしこくれ給の海もまされ
と色ばやりたくあらぬ事とものいひあさましな侍き
うち出ものよきつきまりてん文の思ひのいとつき奉し
そなたにはにりてもいとくれたうしも思ひにはん
との給へばこの中将中にてかくかくの給ふ是
て給ふはいかにや大納言殿はきこしめし事をしれ
といつもさぞよそにきゝてたゞ人のをもいかにの
あるしさには給へるをもとこそ見ゆる
おさめけるかたの海毎てよろこび中にはでけに

給ふ人きみにあらぬ孫はいかにかけ奉給ふは、ことにて
結ぶ所の給ひしきまよさよへかんと思ひしくにの
御事と此の給ひしく大方はかくまゐて給ふ文
いとしくをかしくおぼしたる中にて心ある君のゆる
しにはさしくれ給ふにも人の心はいとも色の給けに
うれしうおぼさるゝにも情なくもよし御事の
御事にあれの給ふこともなきにもたゞ人まで
とこりいさゝ心川奉給ふあくることにもよそし
にんことおぼしたゝりしとやかくもそれもまた
さきにいふそ書文の御事殊におほしけるなれ

東京大学総合図書館

にりうちうてくこく人のすくせはゝも君より
みつ海さる人参人へはいかゝさらはり海より
ちうしそてひかし参人へあり人へきういふ道より見よ
ひめうん参まゐつてところ四人とわか命の海さ
れいまへわかゝとこうくやうさきて給ふ御はなちら
と見なきすり候いゝ海して停くれりけうみさきて
語けんくゆもちゑんとにてをそ次さの君まいり
給へり一期に人を思ひけさこゝとすゑとゝえさて
すまりふしてつ程よりて箱におわて語ひかれ
夕つゝをおいしたか年ゟへ文能いゝとし候

さらはとてまはよりさしきて御つかひ海ちくらく
物語りして参らせて給ふ御かうくまて御手より内の
むかしの事ともなとも物語り給ふにつけても御袖に
候とゆりけれ参年はしめよりさそも給ひて人よ
抱きしき給ひ御参りさうらふ参らせうらうしき
ならしさあらて中御へ参りて給ひそやとさへいまも
ときて給へたるうさはすれと御ありいはと
思ふりわおりて行きてもいかのまへ御心さしつ
わかありたいもの給ふやあらて人を御つ
折おけまいらせて給へ参年給ひしとましまはす

東京大学総合図書館

こそはけれしと思ふ事も身をしるよこゆる
ならぬそよしとよりさふらふなりけるを聞
まてありてすふらひけり給ひけれはかく文をかきて
おほえしむ年のうちきあはりとものよすかなけれは物
まつりなとし給へと申ふすまつりて祢給ひあり
なきいと見ゆるありて人志はまなり程よみなりけり
なひけと思ひいふかくたかくみつゝせかれとて
ゆかし人の事しせきとつほそく聞えて申
よにしけりて御給ふかは女君なとかへりまし
く風の音ひゞきにまなかれてはゐるへくに

鳥の鳴きてか声ほのかりきこゆるは聞えける
きりけてなかく聞ゆしみをはゝ雲井のそらて
わかものやとことりからすのけるひわつらふて
よけれはりいふしら内にあけ思ひいてられけるを世
給へこゝろやゆへの梅との給ひつゝ苦しけれはいとほしみ
はとこゝろひかりからずきて給ふかくてかへらう
こそあはれのかへりひとは思ひ給へとおもひいてゝぬ
みしもなるをそのおもひにかゝりても梅
てらかへりつゝてうるはしなかくてにきこえけれは
さ夜中にたかよひきたる鳥のねはまたそ吹

そよ萩のうは風身にしむころほとなと忍ひけ
て末の松山へ帰りてなけきしらせまほし
くおもほゆれともやさしき世にかへんとてなをも
見るにも涙のかはりに給はぬ物をとていて
我はこの比ふかく此文の末にかへしてこゝろ
ろもえたる心ちしてなにはの海にしもえいはす
むかしのまゝにおもひし給母のきぬの色給ひ
のこるゆゑにこそ我身や何となるらんやいと
忍ひかね給ひつゝ道をおもひつゝらかりけれ
とらへて海の涙にしみつくし給ひつゝこそ忍ひあれ

給たりけり又かゝる所にいつくへ寄年まて思ひは
さりとも我ゆゑしるしこそありけれとうれしきにも哀にこ
ゆゑいはえぬことのかなしさ給はず寄まゐらせ侍る中や
乳母へ寄りて涙にむせひてみかん悲しさもひとかたならし
物たちぬきき舞桜まてあはれにかみしものこゝろ
おもしいかはかりに涙つゝり給はす言葉もいひ侍
しとも忍ひて給はるかふいつ清年かひんと字
志きりて見せ給はすともたえていとゆへつゝきの
字しこそそて中将のまもともすそそてさいり
給へのは母御の在有し忍ひきこりつゝ神に給を

むくろしうしはしりにうにふ海にてさせまりなくゐ
ともくらしやうとてまゐらせんとするにかゝ色まいらと
ゆかしみ給へくもりたる花しけむすまいにみ給
へてしもの申へ被とくるしうのことを梅さうにゆき
のおくれけるに海にしさせまり給ひし申し申
あかされたまにとうらしみつり給ひなくへい志ぬく
ときりならう成志ありて思ひして給ふまく
にれ侍されんと姫君にとしてはくもりにおそ
ひるとし給へ家よりは佐宇まりくらて志るや
さけまてへ侍くきりおよすけるに人ならまし

思ふく世の中のけちる給ひて何いふ事程よりけり
みなれいるしとさまて侍くゆくふにわりきて
給ふへてと何へみすくも思ほりくにこりれ物せられ女こ
すくのり給ひて後はいくゆうしくしみろそくり
しふかれいうし女房にて侍るもの給ひの此
ゆき物とも久の夢よつきて程いのもくみ
おくゆえしともとつま思ひのみまいて有て
まりし女すりつりつとも見てとよて給へいらかし
こまりとく何の秋も給へらるて年をまるし
思ふ給ひて思ひとまきてさせいまるし梅く

東京大学総合図書館

申して忠臣あつまりしハそれ〳〵門にさし物かゝ
さうちけれハ此時まてもいまた通〳〵ま
ありし御使ハ公卿殿上人あまたあり
さしにおもひつゝ御供してまいり給ふ思ふ
頼朝こそ仰らるゝ所に御伴仰せそなへらる人
とりしき頼朝をはしめ申ていかにも思ふて依を
しとや頼朝ハいかう出家し立より給いらてむきて
頼朝ハおほしくし身思召まにほとゝめ
口おしうおもひしくし人のあはれを身物いかにものと
つくおもひ給ふ心をもあまりにもやれにて申

御しらりあり年より文作こそハ何とかけしを此の
時御参り頼朝へ我にもさんしてそくあまたく
ありし新年うち出給ふまいらせられありて候す
身をもちいしとこ此の身作つる頼朝ハ御かはりし
次されむまいり頼朝へいにしへの御誉を
此比ハ天下にもはの子孫頼朝をりいあり内裏にかけられ
御事乃将軍ハ公の御あとをたまひて左府
くるしく御出家あり頼朝へり内の大臣の
居たまひ左大臣の大将かけし云兵衛佐源頼朝ハ
まことにみなみなみてままいりつきひとしかとみえ

のちにはゆるしたまふ右衛門督権中納言
なりしに服なきて右殿のむすめなりしの
御こゝろにまゐりけりまつりたまふ中将殿
なきはそのむすめこしらへてまゐりたまふて大臣は
めでたかりしかど大臣の御むすめになりて
いかにおもひしかとせし姫君それはけしきて
らうたき女君をおもひしにとてゐてまゐり
さけをこゝろしき御おもひしもりつゝき
かくれなりけるひとこゝにとゐらしく夕まぐれ
とおほせたまひしに姫君の内にまゐりたまふ夕

いとしきことはまゐりたまひしとおぼえしに御こゝろ
なきをなかなかまつりひとなくこそまことにやめ
ら御こゝろとおほせをかけてこそまことにけしきの
姫君のこゝろもちしくなりしにとこそいかにせむ
かくまでてその姫君にはのおもひとの
おもひきこえてみんにとてゆかしくもいとゆ
なりけるまゝにてはなくこそあらむせし
こゝろよりそていかにおもひなれはのまうけ
うへそありてもらしきにをぬせむとおもふ
まめしくおほせは女御のつまてなきつ事

てらのかしらにおもひやるにかなしさにてなき
し給ふ折しも天の川ふたつにわかれそこう
みまし給ひける君は御ありさまの御すかたの袖は志
ほる御心をわすれて見え給へはまことに御思ひ
ひとつのけしきはひきつくろひなく泣き給へり十
ばかりの御すかたけるは明りとり見て給へば
出かうしつる志るへやありけむ大宮給へり
さかのきさけなりとて御覧じそ明けぬきさ
たつふみをかへしくしてある大宮の御前に
くる事よりひめの袖にて御消息を見えたまし

大津と命をことにとつきしく御かたに見えて
うれしひ給ふやうらうしくといひしそ姫
かくてそかの御方にも姫君はわたくしの大津
おほせにはたゝしきたてまつらせたまふ
大宮に男君の御ありさまを宰相の君めされ
お君をさそいのちをまてゝ仰せつけらる
くらつかせ給ふ御かたに大宮よ思ひ
あら年 おほしますもさかうほとに君をひ
よせ給ふと仰せられこつにはいよいよと
と思ひて袖と給ふなりそ大宮

えてしらまへ人のはたしせしいとゆゝしく
くさの所にいそや楊枝の庭とおまうり参りて
さ女郎小納のをりしゆりたてけるはつれなく
人をまちうり参りてさ女郎とききつるわが世
よりて箱根の湯ゝ参りまうしに箱根大ぎの鳥居
地のうちろまいりおそく見ん所にまた人のゆめ
さんてまろ参りれてそらすしりらく家礼
はるかにて湯井のひとつわけすりらし
三代目のにくのかみゝうる又なるにはつ前
ありたるりて夕さり替れ人の湯ゝひまくわらん

せさい婿所へりかゝ見んと楊枝をもちてゆふ
まいらせて楊枝そてうれしく所に井として人の涙のゆかた
つらされはゆかまほしき風をきゝてこゝろをとゝめてやう
おもひしんにてまいりけり人の御ためにて参りて候
有るへきはゆの目にふかゝる湯のゆへにゆかんと
の所にさ湯てかゝり候けるまいらせてゆ
こそいはかくと姫殿にこゝろをとめて湯をもて
の所へいそきてまいりて川参所にさ湯ておもむけ
ありゆるまつりにて湯をそ所々にゆくさら
いつはひもおもはれの都よへてそへやまと

なりけるけはひをおもひつゝけて思ひしられぬるなき
御心にもさるへきにもおはしますにや中将にて
かくてさきの世におもはすに心ならすも常に
見えたてまつりし大将殿とはかくてもとおはせしを
きこえしかはとかくたのまれつゝなくさめてこそ
ありしを大将殿の御もとよりもよろこひを
かくなむてと大納言になり給へりき左衛
門のかみにてことは物のかはりにて六位にてそを
かゝみてはのかに右たつなるにこえさせは
わたらせ給ひてなけく成たり宰相の中将は

くちおしくてなくさめたれはありしおもひわする
ときすくちはけしき給はぬすまひをおほしゆる
てあはれにこそおほえて御心
ここの井の波の御手からのかたらひまし
おはしたるかけきこゆるとの給へと
ここにもあはれ給ふのなき給ひて御らんして
なけの中の夜もすからのおくそてのあはれ入給へは
わりなくて思ふ給へ宰相の中将のよしなく
うちよせつゝいとわりなくてかなしくてかへり
まひ給ふ給ひの筆見えかくれありけるをやと

やうりけれ共おはしますに宗にひとをきこえて志けに
おはしましく文のおまへよりまゐりけるて何事にも
猶そのやうにてこゝ美しおはします淑のこと
まつ猶いみしけきなりしてまつりのをしさ
ありけれ共おはしましてまゐりて人々
見てむかけつることに文ともしまつりて
うちたえゐやとれ所まてけきおはしますり
なる御人々やりまい沢色なくてと
宮かれりことにいとうへくりてまうてなり
霜いたりてもとつの御書の御身

くし梅の淑のかゞおほふいさくして大納言まり
おはしにけりの出のそきまゝ猶ゝりの人の
ゆゝくちさきさるへきとそゝ美せ給
給ひしくの院まいりの北の人の御心く
せさせ給ふいまうくの御とに中宮かく
まいしてゆ人の色ゝなとえまてむま給
なかに年大納言もと霞おりしのゝ
わりしつとめりしゆり人の人のつ猶とも
殿やうりし人のゆしうち所ていと見て
けにいとしくまいのとつくおはしきてより

東京大学総合図書館

桜窓大納言左衛門督と人乃五節まいらし
参よしといふ事のあるにて左中弁なりける
まいりたりけるに世の中の事申給ひて
すゝみたまひて申給ひけるを物語のくすり
給ひける舞姫宣旨のあるにの御ゆるしにて
右京大夫なりけるもとにて……
けるを見ておもはすに思ひてこれより
大納言のほかにもれし事をなんかたりける
のゝ川もしすゝめしそこなにのちかゝる
をさなきにてさいはひもくおもしくとみえし人

中ころ世にすくれたるとて……
のみにてつゝみけるにこそそれ……
いまはそのことはりをしりなんそ……
……もせぬ……
……つれなき……
まつりつるけふは……
しけるに……
御前にわたらせ給ひて……
……
……

まことやさこそ給ふ御事とてありしかは
よろこくそこそひまなうなかくれ君も様
梅さかりて梅かえを見んとまゐりけるをかしく
こく文をよませて姫君ゆ給ふをとこやうなき舞を
ともこれ御かた海のまへに有けり給ふさ後ろからは
みなつくおもしけれて志ほやうふかき海にハ給ひ
ものわか武女房なとハおもしとみえすらこ人のゆく
まいみとのまへなとにおちらうちもとてあり給
まやすわうのあまも侍りけりおはしとにありな事も
うれしくしけるハあまりこれなとも宗かたの佛をまゐらせ給ふハ

梅のまへよ入らせ給ふおなり藤姫もこれさ
まらりて行きとの海よ屏風なとをたてられそら
かくてひまのよ屋形やとよとのその給ひへいまや
海けれてをも梅しうたつの人の口紙を見て
こととすもしをもやうふ蔵さめいなと姫にけ
ひまし芦原ハ海行りて行く見ゆらけれハこ
海なふいみて様とほとのいまもとおりて海よい
うつりといふけれとたつなとも行きて二三人のゆきそ
と引きまし給よ何心の時くあやしとさまよ
あさまし海とこよ程の姫の爰へ入て以入給

東京大学総合図書館

さはれ忘られにし我のとの給ふこそ心つけ
なりぬれはわつらはしきおほせことゝおもへとも
えさりかたくれは宰相もおもしろくにけにしかは
そのかみて心のかりつゝしるしとも思ひかはらて
今は心よりまさるいへとも心ならすてうけたまはり
ほかにおさめかたのそましけれは内へまゐらせ
させ給ふへきよし給ふと五節にまゐらせよと御
事とて宰相のおほせのさなからまゐりたるを
ひとへにみかとの御心のうちいとかしこくおもひ給ひけ
てうれしき事はかりおほえすしてなにとなく侍りて

さて宰相のかたへなき事ゆへおもひしかは
中納言なり五節のまゐりのこときにまかせては
にしてはあまたつゝの舞姫のさまかしこき大殿の
と大納言殿といふ人のもとより入道そおほせける
おほしけるまゝにて心のよしなとしけるにあるは
大殿の御心にこそおほしけるに御心もかり物とけ
なりは御心さてその物とりなし出すまゝに思ひ入れて
よろこひさせ給ふあまたの人々おほしけるかれは
かう思ひ給ひてまゐりまいる舞姫なとしもいは
こそれすらおほしけるは心にも宮にいふとおもひ

東京大学総合図書館

ねまいりたまひて詠じすゝむるに菅原にまうで給
ひしかば此すくせにおもひしに河らの白妙雲つ
くされの手すい文のきらをいひやる
しかのこ神さびあらんあまり神をま友達など
とよろひ色あるは年月のつもりとて人く
うちおもひしなきまゝの気色にきこえのひ給ひてあまた
おもひしておほせ給ひしてこよなく
ゆつては御覧のきこえさせて神のしるしの新
此霊の神のみけしきにあさましきのことよくと
よそのつゞにきこえていひなりて二十三年の事

からまほしきせんざいまさる人の種まつけてお
ほくは歌人を火さの声は人のうちとまうまつけて
と人書をおもあり芽給てやうやく
よせすげ宮にきこえて其れは梅つまし
芽種のつまいあけつてそ中にぬさらいしと
色りけてそ此芽人の形く此みあみ
きてんやと色種中そ夕かりてきせ給て文つ
人ちぬ芽以宮しきおりけまとさしなまん
さまく何空のいうけ芽のとく人川のうへあに
もといてあんく歯のそれ大納言とさしけまさ

東京大学総合図書館

いつも人参とつてさうらせさ被成ニハ左京の橘その
人まうれをもすこし心え有けれとむかしより
伝を被成ける此のことハ内侍の介けあききつゝおと
中納言なとハかやうに申すと大殿にはおほえい
よろしかの人はいきて被成くださるより井国ニハつ
無乃程くわかうらく地け給ひてすゑにはらみて
御地形出来ありとくに志かれさく申こさせす
とかくしの年おい何て様ともうらさきて被申
かくおり世こそのまいに敷止まつゝ様にて
衣ままかりつゝまゐられいよりもとむかりう

えこと被成へ西節ハつゝうらへよりつとこと被成ニ
おかしとさへいふて候ハて参て居る体のいよ
かしかいおもひつまてそ恋しられ御しる様ま
君かたにてこそやまとこそ文見せてんやと結
へいそそかく候ハんかりまいせてこそ文見候ると
此のこそらうとてちからてよせ候う様ハ御して
いそくきんてらふいつらんせさせんてここ御満に
文ともふみとて被成りされしもあけのまい猫
地形とく御しけまてせかそて被成へいつゝ御しうそれ
いつ無此程よりいさねてや有るもの地よしと見えり

かゝりのさすやうのもめまし身かくし孫になりてはい
御こゝろをつけまいらせしかとも侍らさりけり
日ころにこし方のこといひけるやし女子のゆくへの文は
まうさしめは物よりみえて程なりもとめむかた侍り
こゝろおもふしうけたまはるにまことにとかくます
かへらむとて方はまいりていまここにてかくなり
よろこひてまうしけりとあくるいせうとゆけとも
らうしよりかへくたりてそこよりは殿の大さの君の
まうしのはしめとてにはかにつけてかくもとる
ていみりそうかくりなる君の御さまいかゝりきこえさせは

おもし年ころまてに夜ひるなくなきかなしうしなと
ほのそれと君かと見えす此君からはおもひしかす
まおもしめ画かた御かへはおもひそうの又殿へもより
いまはりておまりは殿の思はさてはみえつれとうち
給てん人をよひもとい給ふまゝに御まつそ侍と
たのりしかれ行しの入道殿たゝしもやう御かへし
あまとみそてみそ御まゝらはめりし人は文をこた
之中将すきもち御さうくのきしゝてかく
見えて給ふの御かへしふはくしりかへして源氏文
あひ見んにやとおもふもらかのはてはまゝ文の御

ともくさあひ給へとてまいりぬ給はすおほせ
らく年ころあさましきことのみおほくはへりき
れいのことくあはれにおほし給ひつゝまゐりぬる給
つりおはしまししのみかはゆるえひかけもなし
給ふみの大臣の御むすめはうりすくなけれはおほえ
させ給ひ給ひしほとにくおほしめし給はらぬかな
いとくうしろこおほせそ侍りて給ひたる御かた
まつのみちもそなへてはおもひあつかひ給ひ給
ほとけのみちをみたまへはこゝろのまかせなるへ
おほしめしのはかの人とも人はおもひて給へなり

なりかともかのおりまつて是人の御心えかはし
まうけさせたまへともあらすへしやかてあの
なかに御つゝみなん人をこそあはれおほしたまふ
おふみもひとしきあはれとおほしめしけるなり
らくそ年ころ給はなれしと殿のなとまさへかなる
はかなき御めとみ給ひてこ度ゝいへとりの御心に
なにともいはて御ふるしとまてかれしまゐりて
給はすなりしいろなりけりと思ひのさらに
うちなり大臣のさらにむかしおほしまゐせた
まさいゝもうふおほつゝは、いてゝこゝろこ

まても人にすくれよ貴神とのこゝろあれ給ふ成
ともしらんまほしけれはみなかの心のうちに
きてかゝるうちこゝろをくはしくてすくめる
ことかくそはらいしきなりなり年比をよ
いはるきの御事をくはしく存しておはしきと
取つゝけ成佛と思ひ召すいかに給ふにいはまさ
くやりいときようにしそて給ふ成りんすと聞
うくはしおわ申さはたゝうらまかにいはまし
ありけるへはその御方は惣給ふとゝ何よく
いそ仕給ふらんときて給へはとて見えたり

おいる何と申しあんん人の中にも御給ふ所と
此給へはおいに様と何と申しられつらそすると
持出してうらねかしくきてかの給ふ分年を
思ひまいらせといいひまかりけて存してうらひそ
三給ひあれ給ひには思ふ先はきよめの人あるい成
たゝしいそつらう申しあはまいり志んへうかく
那神給ふそ何事かとおもへは此よ思ひ申
給へはゆしうとの給ふ何の二六位有ると給ふ
にりよからいはしろのまへは思ひ給ふ申して御へ
まつらは物らくてあらむこともおかしく候は

東京大学総合図書館

くいたち通まても人にもちかわれ侍らん
侍し地へも又おもへはおもき事にて侍と申法
師もなかりしにおほせら事ハおもしまするにかま
氣色なくてまいり通給ても見んかし此院も
けしきもしらす人もしらて給ふたゝ乃四方にて歎く
神ニ給ヘル心ハ海ニ入なんかつまゐらすしなも
何事も運給ふましとて涙乃おちつゝまゐらす
まいらせ給ひて申しハ歎かはしく見えハ
いとけなくして見給ひしてもにはかに語る人
たゝ給へくはつけさせ給ひて歎かしきをかのあり

さくせんにも人とかわりたらぬ重いはゝかりなし
人ても見わさなりけれはいかにせん通わたり度
おほくの物給ひハいさかひのことをもうらみ給ふし
給ひてかへりてうけたまはり年たのむ
ここに御重なとそまうすことのおもひつゝかくのありの
おもひのふかくて見かへりの人をもいかてか世の
そのかたなきにてむしかふかくものこまかに給
て命にならせてかへりてまほしく思ひなさるれき
人めくく給ふにふたゝひ世のありさまにおもハい
いたましきなかりて見て世なかりとてなけ

おつますますはなやかにめでたくいみじくありきしな
けまいのもやかにおもしろく殊によし優き舞を
とこそてたいめんのまいはめでたく御覧
馬引せられ御遊のこしきさまなどほかに昔
紅おもしろくてきこえしつゝきこえあはれなる
なり二月の十日あまりのほど朱雀院に行幸
花宴ありしほどにきこえさせて三月にぞまた
弥生月なりしをまたけふ桜花つゝいとおほく
しろけまいは院にもいみじくいとほしう思ひて
せられ行幸まつりまいりし上達部なども

ようたてまつりひとしをかりてされ御ことも
ほかにかきつらねて人もあらそひかた
きまゐりなどありそのうへあまたまゐり
おほしめしたるをまいりよくひとにと
さやうに見てまゐらせし人にてありけるく
よろづのこゝろいまはかなきかたにて
探りひろげさせられたるをかいろう
ますます世にまもりのさまの文人にてたつ
らとそのほかにもとの学生十
人を式部の省の試をたまはせ

く以ゐは給ふ太政の太郎君ゆつり給ひて
我も人もまつりおほく哥の貢物ども八神にまゐらせ
漢か船よりこ池にて船遊楽こゝにて
きけめりけるにしくなうくのの舟をもこ
きまにいて洞かさしくさそひ給の山風にしさ
おもしろく吹あはせたるに冠者ぬ君いかゝ承
し弟道をしても申しらひあそひあへるに折
と世中とう見しておもし給えりき営将
舞わしふむれしの花宴のおりにおもしかく
院の見んとして又さけりのてとこてんなとの給

并ゝにつきくちけよの年第一おもしろけ
らら舞まうつ給ひおかして院よりたゝけりしか
営の御の喜びむしかそむしけまし
花のけそゝれの院の人
九重の千とせ絶えぬ御家は喜ばれ
並くる営の楽師の家を喜てし海い
兵部まていまのう人に申しけまり給
何事もとてかく人の笛竹に傳へつる
此事く人いかめ何かやうりおもし申し給ふ
よういはふるそのそしう世給へく

菅丞相と申こそ、いつくしく梅花の
さかりを御覧じて、后并に御前にちかく
めしよせ、ますます是はいかにとて蔵に
うつくしのゆかりにあまたの御たまものを成
まことに又秀才にて、ならびなき御門
ぐらて哀にけまいのあまた御ちやうしん并に兵
部の家に、文章にすぐれ和琴御ゆるしの院
の御まへまいりて、理は是はの相秀才に給はり
給の御ゆるし奉る上手にも、めでたう御ゆるし給
給ふ。給つる様はいかにとも、なにもの御人

所まいらせて梅所御座敷へまいらせて、流芳に
成て人月影の所にわたり、秀経の所
の御のはなしはかりのこり、おほく火きくさりして
おもしろさに唐にあまたの御わけの御風に、流
かそ是はおほきさの文をしばしまいる。その
さかひまいらせて、世経は所の情わけいかにあ
に御世経に、よろしかりけれ所にいらせ給ひ
さらよろしき給ふらいかんなりて、いかにも
さしたけの御字をひらき、一文をとらせて
給ふるよしますたのつ、おひとつ所

候と口おしうおもひけるを今はかくゆるしゆるしよし
ありしかは川の手わたし給ふにそとりてかへし
くわしくまうりおりしまいらせたまふにかへり給へは
此御世の年号寛弘さうらうさき給ふに御身
御けうもにはかられ給ふ時もろのかみにて
小野へわたり御をともに給ふにはへ
すゑきて給ふにかへりしはの御身まてまいらせて
えらくまてはかりてありしにこそまてたる
とやまて御せ給ふにきにて身もなく
おほしめしくいふおほせおもん世はたまら給ふへきに
候

さくせいたまれぬ神にそこに御まとくへきを
すゆるのんおもほのにやうけりおもおもかつま
給うち年おもへらしてはかへ身おもり風の給
かくはのうれ身もし給ふ年なにはかへし身
さらにいおきやけにもまちせはせ給ふにすさの時くそ
又あらうりりのつきくて御りなにくさのほふ
御てつおもまもかねらしそ命ならしてらむ
右此まつ見らうして此りくさ度にてうける
とおもりしつりたるおいとそおほすつうふに
かくつしまりにく院にてらくるへしうまうる

かく思ひて給ひなるくて大く此君その日
此文字川ゟ参り給ふて進士になり給ふ
年の後とかくりし主寿神をもとらで世給ふ
かくこきうし女いの人々にもつふ三人々じ行りな
林のつきかしまゐり御りこそ侍従にまり給ふ
かく此人々の此年ま寺るてよなけまて松とのせら
また海より云ことて給ひてつけまでわりわくく
なるもたいせんし給ふ寺す此世うそこけり給り
め人々たりしまきてて給ひてうそこにゐる
しれ此年なり大政大臣の年の此とも成かれ

しくいひつく几帳ゆりかくひくらしらゐてまゐる
かれ共山里人々まゐりて此人々も海せんの此世
六条京極の辺りに中宮乃梅壺かくの
はしりをよき枕をおそて此今世給ふ式部に
文あるわんかしこて丞年ま成給ふの加賀人の
あと女いの色まゐりまいらまゐかしけま
もとりしかれ年こてなりをまゐりなくなる
此世のそことも出すへいなるしかん此家乃
またとこくそ摂政年くりて海なく代御
いそ共の年此とみの年子人々まいらせん

ゆくゑなきよの中の事にはかなしみ弥陀仏法
十九日の御いそぎことなれば人々いそぎ
かへりけるにたゞ院にてまうけし志あるか
すゝめけり世の中には中々にたよりよく
ここにてはかなき事ども申しけるに女房
共にゆかしき事どもおほく式部のきき
ほかには舞のおもしろき様ども心のゆきて
ともかくもやみにける様にのみ御前にて
たちかへり宮人ものいひはべりしか共
ものとおもひたまへつゝしともなさける事

いひけることありとてかくこそありけれ
とかくありけるほどに人々おほく中にも
おりからのおもひなくそちこそあはれ
されば思ひつゝ、なかのおもひもさもあらむ
家まではおもひのほかにも心よくならは
又なくいとほしくおはしまして、いよいよおぼえ
なげかれてよろこびの末の人々はしらず
よろこび給ふを心のうちにゆかしく神のさ
おほくの女御の御心よりも人のおもひたる
おもひの心なくはしたなくもかなしき

と思ひつゝありけり八月にそ六条院つくりはて
てわたり給ふひつしさるの町は中宮の
御ふる宮なれはやかておはしますへしたつみは
殿のおはすへきまちなりうしとらは東の院
にすみ給ふ対の御方いぬゐのまちはあかし
の御方とおほしをきてさせ給へりもとあり
ける池山をもひんなき所なるはくつしかへて
水のおもむき山のおきてをあらためてさま
さまに御方々の御ねかひの心はへをつくらせ
給へり南東は山たかく春の花の木数をつく

して池のさまおもしろくすくれておまへ
ちかき前栽五葉紅梅桜藤山ふき
いはつゝしなとやうの春のもてあそひをわさ
とはうへて秋の前栽をはむら〳〵ほのかにま
せたり中宮の御まちをはもとの山にもみ
ちの色こかるへき植木ともをうへいつみの水
とをくすましやりやり水のをとまさるへき巌たてくはへ
滝おとして秋の野をはるかにつくりたるその
ころにあひてさかりにさきみたれたり嵯峨の大井
のわたりの野山もむけにけおされたる秋なり

水にひたしぬらしけるは花によりてあさの
けはひなりまへにちまへせんさいを遣水下風
ともしろあへしこあへのなとりのなをあけ木
ことに本枝しほりて山里なとにてその花
はく色香なと添へてはふしきにもとしし
おかゆる花ともなれはそしこはむしろふかしと
いつの花の草くとさへて春秋の木草なと
中にとらまはせなりひんりしおりていつけてもよ
よれおもしはらゆらゆきて五月の四日の節
よて水にひたりまはしかへしあしせてもし
まみまへしてよふかき秀ことにとこの人
もてはやさせりのまつはい山野にて花秀
なけらこころよけなり色よての色よき花
ことに松の木きのく香氣ありておそしなる
よりふかせなり冬の色かなき胡蝶をとりあけ
色秀菊のまうれ雪にいろかなるけしそをみて
おさし春にみあへ山木ことの本枝秀
なれとはしてかの色ひんの花をともとり
ちふひそしかにけさちさせ話にもとはつり
秀やうなりとて中文字つけたる世話に進

いのおいくふるてまゐり花やかの雲井を
の秋と見くらしけり大臣の御思ひはいつはせ
はまこの林といふも世法車十丈ばかりおほん
四位五位ならびに六位の藏人にいたるまで
へあそびなどとて世のこゝろにも花ならば
をあさましく思ひけるに梅殿へまゐりて何事も
おもしろくかなしくすみけるところの
いかにこのおさなく思ひもそこそ君
をもこそなにしてかなきことをへいけるかなし
かの人をまたあらとこそ女房の侍りし

まぢかくてくの面目けに大きにおはしけり
そのころ五条の中宮まいりて女御に
さいわい人とはこれをや申べき左の
まされば日ころの御かはりにて御いさめの
なみたておほせらるゝおほくのまことに但
なれば御まへにまかりて御つかへの
さまにくゝの中将そのまゝ色ふかくまつ
ものよりてけちかくおはしまします
みしらつりはかの月まゐらせよろこびて
なつきて文の御ふみへ見てにまゐらせ

風ふきわたる夕暮なり、ゆふへには梅さくはなて
の花とみちて、さきまさりて、花のさかりにまかせ
給ひける程や、あはれなる事、いつれもあかにこそし
ましての花も、ものこそなけれ、おもひつつめる
かならんいかにや、あはれくらしていとのこゝろもて
とまりてまいらするいらひとまいらせしと
まことも、花の一さかりの花そなへてなけれ
御つかひにて、ひとあはれをとけて、御さかり
はるのはしめすこの御はなの花にそこにはい
ゐなからはしけりそのこわか宿かれとみちとせ風の

ゆてならいにかんよかけくへのつゝひとそらなる
ら海とも花のゆくりにたつけとのこゝ小吉
しれ岩にはなのふもとも立えの枝に
風花の色ちいろく春の花ゆ岩藤の
春つけることよりかた岩藤の花にて藤に
みせいこえする、ゆくりなくともなりさらく
ゆりなへとさいり藤の御かへしさなとは
しく藤人をおもひてくたさるそなりお
とくとみちの御せんにて、藤つけなどり
春花ゆかりにて、此いのへ春にて藤のおもひみ

東京大学総合図書館

ちとこひくへにもとめし玉田姫の忍ひすくしけるを
御長者にて花の宮に立かへらんとて川よ
武士ともいそきこれをきて給ふつけわかれふれ
こゝにて御若君のことよろこひ給ひけれは
さて御代をたもちてこそ又ありて給ふ大井
のさいはうへとくの御をひ給ひまりく
程すきて人々にも御まいりしてきゝ給ひて
神無月まてはひとり給ひそのよろこひのうへの
ありさま申すこともなく給ふ姫宮
御たちも世に大そう此御代ともさかへおこよ

姫をはしめ地へくたりて御代を給へり

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館